展覧会紹介
「ジャパニーズ・モダンデザインの誕生―一九四〇年代から七〇年代―」展を開催して

京都工芸繊維大学 美術工芸資料館　博士後期課程　芦高 郁子
京都工芸繊維大学　美術工芸資料館　下出 茉莉

京都工芸繊維大学 美術工芸資料館では、二〇二〇年一月一四日から二月二二日まで、「ジャパニーズ・モダンデザインの誕生―一九四〇年代から七〇年代―」展を開催した。本展覧会は、金沢に所在する山鬼文庫所蔵のコレクションを借用し、企画したもので、戦後日本のデザイン形成期の様相を、写真雑誌、家具、プロダクトという切り口で一挙に紹介した。

山鬼文庫は、工芸・デザイン史の研究者で、柳宗理デザイン研究所元所長の森仁史氏によって創設された私設図書館であり、歴史、思想、美術、デザイン等に関する貴重な資料を膨大に所蔵され、一般に公開されている。また、当文庫では、日本のデザイン史における重要な家具やプロダクトも収集されており、貴重なデザイン資料の現物も豊富に所有されている。

今回は、こちらの山鬼文庫から一九四〇年代から七〇年代を中心に、日本のモダンデザインの形成期における主要品をお借りし、第一章「グラフィック・写真のモダンデザイン」、第二章「家具にみるジャパニーズ・モダンデザイン」、第三章「戦後日本のプロダクトデザイン」の全三章で展覧会を構成した。

第一章の「グラフィック・写真のモダンデザイン」では、戦中戦後のグラフ誌を中心に展示した。日本において、写真を使ったグラフィック表現の先駆けとなった集団としてあげられるのが「日本工房」である。日本工房は、名取洋之助（一九一〇～一九六二）によって一九三三年に設立されたグラフィック・デザインの制作工房で、優れた写真家やデザイナーが参加した。国際化の中、名取は近代国家としての日本を正しく伝えたいと考え、そのために、対外宣伝グラフ誌では、内容だけではなく、質の高いデザインと印刷技術が求められた。本展示では、日本工房により制作された海外向けの日本紹介を目指したグラフ誌である『ＮＩＰＰＯＮ』『ＣＯＭＭＥＲＣＥ ＪＡＰＡＮ』、南支派遣軍報道部の出資により刊行された『ＣＡＮＴＯＮ』などの対外宣伝グラフ誌を紹介した。

さらに、戦時下になると、政府もグラフ誌のプロパガンダとしての利用に積極的になってゆく。内閣情報部（のち情報局）によって編集・刊行された国内向けのグラフ誌である『写真週報』は、写真を豊富に使いながら兵士や国民の生活を紹介し、戦時下の困窮生活を乗り越えようという全体主義的な姿勢がみられる。

そして、戦争が終わり、写真によるグラフィック表現は、それまでのプロパガンダから転身して、市民生活に密着するグラフィック表現として、発展してゆくこととなる。日本の『ＬＩＦＥ』を目指し、名取によって企画・編集された『サンニュース』や『ＦＥＭＩＮＡ』『婦人朝日』などは、社会、文化、ファッションなど生活に密着した総合的なグラフ誌であった。

また本章では、堀野正雄（一九〇七～一九九八）の『カメラ・眼×鉄・構成』や原弘（一九〇三～一九八六）が編纂し、写真を木村伊兵衛（一九〇一～一九七四）が撮影した『王道楽土』など、展示したグラフ誌に関わったグラフィック・デザイナーや写真家の書籍も併せて紹介し、彼らの仕事を総体的に知ることのできる展示となった。

山鬼文庫コレクションにおけるグラフ誌の変遷から見えてくるのは、グラフィック・デザイナーや写真家が、厳しい時代の中で、写真を使ったグラフィック表現を昇華させていったということである。また、彼らは、市民生活に密着することによって、戦後もグラフィック表現を発展させていった。

続いての第二章「家具にみるジャパニーズ・モダンデザイン」と第三章「戦後日本のプロダクトデザイン」では、戦後日本のモダンデザインの形成期から七〇年代にかけての家具とメーカー製プロダクトを中心に展覧した。

第二章では、一九五〇年代から七〇年代にかけて日本国内で製作された家具、とりわけ椅子を中心に紹介した。戦後日本において、西洋式への生活様式の変化に伴うインテリアデザインの変革は、特に重要な課題であり、これに伴う家具デザインの改良や生産技術の開発は必須であった。

洋家具の黎明期には、椅子座の歴史の浅い日本は基準となるデザインに乏しく、加工技術も含め、輸入家具の模倣に頼らざるを得なかった。こうした中、時代の変化に合わせたデザイン運動が国内でも次第に起こり始める。森林資源が豊かな東北は家具産業に適しており、昭和三年（一九二八）に仙台に創設された商工省工芸指導所（昭和一五年工芸指導所東北支所、昭和二七年産業工芸試験所東北支所に改称）は、近代家具の発展に大きく貢献した機関であり、ブルーノ・タウト（一八八〇～一九三八）やシャルロット・ペリアン（一九〇三～一九九九）を招聘し指導を仰ぐなど、その後の日本の家具研究に大きな成果を果たしている。

中でも、昭和一五年（一九四〇）に創業した天童木工が、戦後日本の新たな生活空間にもたらした影響は大きい。天童木工は、成型合板の技術をいち早く取り入れたことで飛躍的に成長した家具メーカーであり、家庭用の家具と業務用のコントラクト家具の両方を手掛けた。工芸指導所を通して柳宗理（一九一五～二〇一一）、剣持勇（一九一二～一九七一）などのデザイナーとの関わりも深く、本展覧会出品の《バタフライ・スツール》をはじめ、日本のモダンデザインの一翼を担ったデザイナーたちの家具を数多く世に送り出してきた。

この時期に開発されたデザインの家具は、現在の生活空間においても変わらず親しまれているものが多く、日本のモダンデザインの規範として確立している。良いデザインの家具の生産を可能にする技術の向上もまた日本のモダンデザインの形成を支えていたといえる。

本章では、それぞれのデザイン活動において日本の生活空間になじむ優れたデザインを手掛けた剣持勇、渡辺力（一九一二～二〇一三）、丹下健三（一九一三～二〇〇五）、柳宗理といった建築家やデザイナーの家具を紹介した。

第三章では、パッケージデザイン、食器、電化製品を通して、一九三〇年代から七〇年代にかけてのプロダクトデザインの様相を幅広く採り上げ、戦後日本のデザイン黎明期から現代へとプロダクトデザインが発展する姿を紹介した。

一口に「デザイン」といっても、モノの生産や消費の在り方、それに伴う生活様式が著しく変化した近代において、「デザイン」の目的や意味合いは少しずつ変遷してきたと言える。日本において「デザイン」が重要視されるようになるのは明治後期のことであり、当時は殖産興業の一環として、工芸の図案改革やデザイン教育が本格的に取り組まれた。その後、機械生産が進展し市場が拡大するにつれ、消費者の嗜好や使い勝手、生産者の生産性に目を向けたデザインが重視されるようになった。大衆の生活に寄り添うデザインは、産業を活性化すると同時に、生活様式をデザインによって新たなものにするという重要な役割を担う存在へと変遷していく。本章では、プロダクトデザインの分野で活躍した、山本幸造、真野善一（一九一六～二〇〇三）、森正洋（一九二七～二〇〇五）などのデザイナーをはじめ、Ｑデザイナーズ、ＫＡＫといったデザイングループによる製品を紹介した。

この他にも、本展覧会の第二会場として京都工芸繊維大学 附属図書館では、山鬼文庫から借用したデザイン教本や百貨店の広報誌などレイアウトに特徴がある雑誌類の展示も行った。生活の変化にともなう技術的な改革は、機能面だけでなく、デザイン面においてもその時代を豊かにするものでなくてはならない。現代の生活へと続く日本のモダンデザインの創出を扱った本展覧会を通して、現代における生活空間のデザイン確立の背景を来館者に身近に感じていただく良い機会になったのでないかと考えている。

最後になったが、本展覧会は山鬼文庫の全面的なご協力がなければ実現しなかった。貴重なコレクションをご出品くださった森仁史先生へ謝意を表したい。

第一章「グラフィック・写真のモダンデザイン」展示風景

第二章「家具にみるジャパニーズ・モダンデザイン」展示風景

第三章「戦後日本のプロダクトデザイン」展示風景